

# 東亞醫學

第十一期要目

## 投稿規定

讀者各位の投稿を歓迎す。  
題目、内容は時事、學術、文藝其他隨意。  
長さは一〇〇〇字以下とす。

漢方と神秘主義

龍野 一雄

鍼灸學より見たる肺結核の豫防と治療

柳谷 素靈

○狐の喜ぶ鴨の頭

石原 保秀

○産後の出血或は惡露に對する東西兩

醫學の見解の相違

矢數 有道

○刺鍼過誤の問題に就て

龍野 一雄

○無醫村を行く

神谷 卓

○肺結核の豫防と治療の大要事項

西澤 生惠

大塚 敬節

○風邪の漢方療法

大塚 敬節

## 漢方と神秘主義

よく聞く所だが質問でもされて「私にはよく判らない」と答へるとその卒直な態度を極めて良心的謙讓的として稱讃されることがある。判らないのを判つた振りをしたり、いゝ加減に故事付けたりするに較べると、右の態度は當然稱讃さるべきであることは言を俟たない。

然し乍ら判らぬといふだけでお仕舞ひになつては頗る物足りない。何故判らないか、どの點が判らないか、何處がどうなれば判る途がつくか、是が判らないと他にどんな不都合な點が生ずるか等まで突込んで「判らない」といふ所以を判らせなければ私には喝采が出来かねる。判らないまゝに暗闇に投込んでしまつては結局神秘主義に陥るより外はない。生命の不思議、いろ／＼な現象の不可解、それは

判つてゐる事よりも遙かに多い「判らない」事柄であるのが現在の科學界である。然し判らないまゝに

神秘の扉の内側に埋没して置いては、情緒の上では文學的感興の對象とはなるけれど學術としての進歩が望まれない。判る所、判らない所の境の極限まで追ひつめる、判らない理由を明かにするのが學術に對して忠實な良心的な態度であると私は堅く信じてゐる。

漢方は陰陽といふやうな觀念論によつて構成されてゐる爲めに、至る所で神秘主義のペールに包まれてしまふ面を持つてゐる。漢方醫學そのものばかりでなく、是を取扱ふ人も亦さう云ふ神秘主義を有難がり、その情緒に耽る傾向が無いではない。それは畢竟個人的情操の中に踰踏するに止まり、一般的

即ち社會的有爲への踏出しには何の寄與も成し得ないのである。

過去の漢方はそれで良かったかも知れない、否むしろ過去の社會は漢方にさう云ふ性格を押付けて満分野に置かれてゐることを自覺しなくてはならない方法論として科學性を賦與すべき事は漢方の發展に對し不可缺の問題である。但しさうして發展されたものが過去の漢方その儘の延長では有り得ないであらう。我々は漢方を古への姿に復元せしめる事を目的とするのではなくて、反つて現代の科學、哲學等によつて濾過され過去の残渣を捨て、新しい性格を持つ所の漢方を構成して行きたいのである。その爲めに一應漢方を過去に於けるその原型に於て把握することは必要である。但しそれは直ちに歴史として現在に連鎖し反轉して來るものでなければならぬ。漢方から神秘主義のペールをむしり取つてしまふのが我々の仕事の一つである。(龍野一雄)

# 鍼灸學より見たる 肺結核の豫防と治療

柳谷 素靈

鍼灸を應用して國民病である肺結核の豫防法と治療法と云ふことが私に今夕興へられた講演題目であります。で、先づ疾病と云ふことはどんなことか、それは一般的に健康と云ふこと、反對な概念と考へられてゐます。それでは健康と云ふこととはどんな意味であるかと云ふことについては種々な學説があります。A. Brachle は「恒勢及び恒態の状態である」と云ひ「Leas は「完全適應状態」である」と云ひ、B. Gruber は「内外の適應條件に適應する状態」と云ひ、K. Galstein は「個體と環境との間の恰當したる状態」と云ひ、緒方、三田村氏は「日常生活、と云ふてゐるやうに種々雑多であります。従つて疾病概念も又諸説ある譯となるのであります。水口博士は最も分り易く説明してゐます。之を御紹介申しますと「身體の抵抗力が優勢で、刺戟が劣勢であり刺戟傷害を容易に解消し得る状態の連續が健康であり、傷害が大で抵抗力が小ならば死ぬ、抵抗力と傷害とが相對立してゐる事象「戰爭」が疾病である」と云ふてゐますが、この説明はよく分ります。これは細菌學の疾病に初めなつて、後に治療する場合の三つの場合の説明と同じとも見られる説明であります。肺結核に罹る場合罹らぬ場合、罹つて治療する場合を適當に説明出来るものと考へます。つまり豫防法は我々の生活體をして、罹らぬ場合の状態(又)は事象と云ふてよいと思ふ)とする事であり、治療法は一旦結核菌に侵されたけれどもその状態が、罹らぬ場合まで引もどすことであると云ふことになるかと存じます。

それでは罹らぬやうにするにはどうするか、と申しますと、肺結核菌が少しばかり又つて來ても之に負けぬやうな身體の抵抗力例へば白血球を増加させて置くとか補佐や調理素や凝集素、溶血素、カルシウム、カリウムを充分に體內に整備して置けばいざ戰爭と云ふときに餘裕綽々と之に應對出来るのであります。又我々の細胞の原形質をして充分活動出來得るやうにして内部的統合を完全にするに云ふこと、つまり軍備を充實して置けばよい譯であります。又、生命原である食物を攝取して之を完全に體內の營養とすることが出來ると云ふことも必要であります。これ等の營養物は我々の體內では血と爲り肉と爲るところのもので、戰爭で云へば經濟力であり、これが弱ければ持久的の戰爭は出來ません。従つて此等を充實すると云ふことが必要であります。又、肺結核菌ばかりでなく、細菌は我々の疲勞につけ込んでつゝ弱弱り目につけ込んで侵入繁殖するのであります。元氣發達としてゐる足先の尖端まで、元氣發達としてゐるばならないのであります。間に乗せられぬやう常に疲勞倦怠感がないやうに手當をすると云ふことが何よりも大切であり、常にかうしてをれば少しばかりの細菌が侵入したからとて我々の強力な軍備の爲に決して細菌の蹂躪にまかせざるやうなことはないのであります。

飲食物が完全に我々の血と爲り肉と爲るやう老廢物は完全に外界に出し得るやう、内臓の配する神經機能も完全に運行させるやう、身體のどの細胞も疲れると云ふやうなことの無いやう、眼は活き活きと輝き、手足は切り切り、身體に底力ある状態に常にあることが必要と存するのであります。かうしたことの要求にお灸は應じ得るか、と申しますと、先づ背脊にお灸して肩と頭と眼とをはつきりさせ、中腕に灸して胃腸の作用を調整し消化と吸収を完全にし、氣海に灸して排泄器管を充分に作用させ、元氣をつけ、足の三里に灸して、健脚たらしめよく活動せしめるばかりでなく、血液の中の種々な結核菌撲滅軍の増強を來さしめることになりまから、自然

疲勞感なく抵抗力増大し少し計りの結核菌が入つて來たからとてピタとせぬ體をつくれればよいのであります。又、又さう云ふ風に實際なるのでありますから、お灸は肺結核病の豫防と爲るのであります。又治療も同じやうにやるのであります。つまり、活動性肺結核は非常に熱刺戟に對して鋭敏でありますから初めから灸の大きいものも多くやらずに徐々に灸熱にならし乍ら運轉することによつて漸次抵抗力がついて來まして、今まで負け戦であつた大勝戦となり、體内の結核菌も漸次撲滅され治療すること出來ると云ふ解であります。勿論此時は營養は勿論のこと漢方薬と併用すれば殊に早く治療出來るのであります。

## 狐の喜ぶ鴨の頭

石原保秀

最近の樽臺會議に於ける、各燈臺長の談話中(中朝朝紙)「狐が獲した御馳走」と云ふ金子力三氏の話は、私の興味を惹くこと正に百分の一の松前小島に居た時のことである。春になると、數十萬の鴨が飛んで來て、穴を掘つて卵を産む。穴に這入つた鴨を取りに行くのであるが、海馬島に行く、周囲が狭いので、狐を放牧して居る。つまり卵を産み、卵を喰はせ、狐の餌である。併し狐も贅澤になつたのか、頭だけしか喰べぬので、残り人間が頂戴して居る」と云ふのである。尚中井川光氏の話にも鴨や鳥の頭の話があるが、即ち之も千鳥の話であるが「或る年寂しい冬籠りをしたことがある。勿論此時分でも、魚はイクラでも捕れるのだが、面白いのは、頭の無い鴨や鳥が無数に漂着すること

である、それは海豹が頭ばかりを喰べて、足の方を残すからで、足の方は、矢張り人間が頂戴に及んで居るのだ」と云つた話である。人獸相食む世の中に、さりとて面白い現象だが、叔母で鳥渡問題になるのは、狐や海豹は、何故頭ばかりを食べて、外の所は之を残すかの問題である。それは餌が餘りにも豊富なので、遂斯う云ふ贅澤にもなるのであるか、或は胸や足などは、どうもコチコチ等の口には合はんと云つたやうなものであるか、或は理由無しに、又は本能的に頭ばかりを好むのであるか、或は全く別箇の事情が存在するのである歟。成る程鴨や鳥に似た所を、頭は何れも其急所に違ひ無い其處で先づ頭を狙つた序でも、一應は考へられるが、併し頭の方が特に美味だとか、或は消化し易い

の術なればなり。回天神丸(今増)大楓子皮黒燒五錢(大楓子(去皮)五十目、靈天蓋(五匁)、荆芥、櫻皮黒燒、大黃、黃柏、擘甘石各三分)服部(ひやうたん)黒燒(五分)右湖九百粒に丸じ、白湯にて送下(金藤散及玉振丸並に其服用法の詳細略)

「一厲主治方 麟龍圓治癩疾 大楓子(去皮炒、四十錢)、烏蛇白蛇、雌鹿頭霜(各八錢)、龍腦眞珠(各二錢)、血竭(三錢)右七味共煉大楓子、合諸藥、又煉米糊丸、金箔爲衣、日服七錢」

とあるのが其れだが、葦軒の治法も其詳細は略す。だが魚の頭を使用したものには、も一つ私の推察を見たものには、私の常に推奨せる鮭の頭と大蒜の黒燒とがある。之は呼吸系統の虛弱者等に常用して、相當有效のものだが、元來は武州田能氏の所傳だとして、衣關順庵の一諸國古傳妙藥集一にも收められ、薩藩の田中近芳などは、最も之を推奨して居る一人であるが、其製法服法共に頗る簡單である。即ち

鮭の頭一箇 大蒜二十箇 右同時に黒燒にして粉末とし、一回に小匙一つ位宛服用すればよいのである。(第六面より)

の第六面と共に他面、疾病豫防の基礎をなすものであります。肺結核の豫防法は 第一、正しい營養を知行せしめる事 第二、治療的豫防法としては所謂健康食或は養生食の普及徹底を肺結核の治療法は、 豫防法第一頁の強張と共に湯液、鍼灸により診療による事

「以上」

# 産後の出血、或は悪露に對する 東西兩醫學の見解の相違

## 矢數 有道

(一)

「治療及處方」十一月號に次の興味深い一文が掲載せられてゐる。それは通津濱鐵道醫院産婦人科の池田眞澄博士が發表されたもので題して「賣藥服用による子宮出血に就て」となつてゐる。

即ち賣藥服用によつて産褥又は流産手術後に子宮出血を來すものが意外に多い事實を指摘し、この點に關して從來全く報告がなかつたのは不思議であるとし、恐らく原因不明の子宮出血が賣藥服用によるものであることを發見するに至らなかつた爲めであらうと強調せられた。従つて結果としては産褥時又は流産手術後に於ける賣藥服用を婉曲に反對してゐる。さて賣藥が臨牀醫家から實驗的にその有害なる點を指摘せられたとしても、われわれは別段痛痒を感じて居るものではない。寧ろ双手を擧げて賛成するところもある。

しかし池田博士によつて粗上にのせられた賣藥と稱するものが、いづれも漢方藥であるといふ點に就ては漢方醫として無關心たり得ないのである。筆者は別段婦人病藥として名高き〇湯や〇散が假りに不當の非謬を蒙つたとしても、これを辯護する義務はない。そんな事は漢方醫たるわれわれにはどうでもよいのである。

ところが、これまで筆者の知人の醫者からも漢方藥が往々にして子宮出血を助長せしめるといふ非難を聞いてゐた。そしてそれに對しては漢方醫學的病理の上からみ

て、決して疾病治療の邪魔をするものではなく、却て終局に於て良結果を齎すものであることを説明に努力して來てゐたが、不幸にして未だこれを説得するところまで

に到つてゐなかつた。たゞそれまでは個人の口頭による非難であつたから問題としてゐなかつたが、今回堂々たる醫學誌に發表せられるに到つては、漢方醫家の立場から一應これに對する回答をなさざるを得ないものと思惟する。

従つてこの問題は二三の賣藥に關する問題ではなくなつて來てゐる。

(二)

この問題には要するに漢方藥服用による子宮出血の是非に就て、兩醫學の見解に相違があるといふことに歸着するのではないと思ふ。服藥によつて子宮出血を招來するといふことは、不必要に血液を損少するものであると西洋醫學はいふ。これに對し漢方醫學では、その子宮出血こそ疾病治療上の喜ぶべき現象であるとして却てこれを禮讚する場合すらある。斯の如く同一の現象に對して全く相反する觀察が下されるといふことは、これは全く兩者の醫學的論據の相異によるものと云ふ外はない。

即ちその論據の相異とはこれを具體的に云へば、西洋醫學では血液に於ける赤血球(赤血)といふ存在を言つてゐないことである。血液はみな同一組成を有するものだといふ前提がある。血液の組成に變化があれば〇病といふ病名を冠して

しまつて、健康人と稱する者にも清淨なる血液の所有者と、汚染せられた非生理的血液を有するものがあることに就て未だ言及するところがない。

ところが漢方醫學では疾病原因の最大なるものとして瘀血を指摘し、また實際に於てこれを驅逐する藥劑も用意され、臨牀的效果に於ても實證されてゐる。

かくの如く瘀血の存在を知らぬ西洋醫學と、これを重要視する漢方醫學の兩者の立場から見れば、子宮出血がどうゆう機構によつて起り、それが治病上どうゆう結果を及ぼすかに就ての意見が、相違して來るのも無理からぬことと思ふ。

(三)

漢方藥を服用し池田博士の報告する如く骨髄内の充血が起り、中には出血の來る者があることは事實である。但し博士も附言せられる如く、それは單純な充血と出血とに違ひなく、産褥性疾患の徴候がないといふことも事實である。即ち漢藥を服用した爲めに炎症を起したりすることはないのである。西洋醫者及び患者側から言へば單に出血されることは困るといふに過ぎない。しかしこの子宮出血なる現象が、漢方醫學から見れば産後の瘀血或は流産後の瘀血排除を果すものであるといふことが確認せられるならば、寧ろ將來の健康の爲めには喜ぶべき現象でこそあれ何等排斥するべき性質のものではない。

筆者の知人の産科醫は、産後に漢方藥を服まると出血がとまらないうえに、悪露も同時に意味してゐるやうだ(と言つたが、これに對して筆者は産後のオリモノはなるべく長く多量にあつた方が瘀血の成分が除去されてよいのだと説明したが一笑に附されてしまつた。即ち瘀血といふ存在に對して

無關心だからである。西洋醫學も早くこの瘀血といふ存在に氣がつき、漢方醫學を理解するやうにならねば駄目だと思ふさうなれば漢方藥服用によつて産後の悪露が仲々とまらなくなつても、或は産褥時に子宮出血を招來したとしても、頭からこれを不可なりとして排斥するやうな過誤に陥る

弊がなくなると考へる。たゞ最後にお断りするが、筆者はどんな漢方藥を服用しても子宮出血は好い現象だと云ふのではないといふことである。不適當な藥方を服用することによつて、不必要な子宮出血を來すことは屢々あることで、これは治療手段としても治療の結果から見ても不可である

ことは言を俟つまでもない。これは特に貧血患者の治療に於て犯し易い漢方醫の過誤である。例へば地黃劑の不適應證にこれを處方すれば、却て不當の出血を助長し、結果として極度の貧血が來ることを知らねばならない。

## 東亞醫學協會例會

本協會は漢方醫學の基礎學研討と臨牀應用の妙諦とを併行せしめて、會員相互の研鑽を益々深からしむる目的を以て傷寒論と素問を研討し、更に實際講話を以て漢方醫方の學術の大成を期さんとし先月第一回研究講演會を開催せり、今月は引續き第二回講演例會を左の通り開催す。

一、傷寒論の研究 — 第二講 — 講師 大塚 敬節氏

〇學的に臨牀的に傷寒論研究に於て最も力を盡されてゐられる大塚講師のこの講話は恐らく最高のものであらう。(教材は康平傷寒論、小刻傷寒論、宋板にても可なり御持參の事) 十一月二十一日六時より七時まで

一、素問の研究 — 第二講 — 講師 矢數 有道氏

漢方鍼灸の指導原理として又臨牀的に素問の活用を知る爲には絶好の機會である。素問研究の矢數有道氏の名講を聽かれよ。(教材は素問をお持ちの方は御持參され度し。同日七時五分より八時十分まで)

一、蟲様突起炎の實驗的研究 — 第二講 —

〇漢方醫學に於ける蟲様突起炎研究で既に廣く知られてゐる龍野氏の一講は氏の深き經驗と秘法を語られ、先づ蟲様突起炎の漢方療法として完璧のものであらう。(同日八時十五分より九時二十分まで)

日時 昭和十四年十一月二十一日(木曜)  
場所 東京市小石川區茗荷谷 於拓殖大學講堂

(當日會場費三拾錢)

# 刺鍼過誤の問題について

龍野 一雄

本誌第八號に掲げた「刺鍼による内臓穿孔の數例」なる拙稿に對して柳谷、戸部氏より御懇篤な御批評を賜り感佩の至りである。由來斯様な問題は立場を異にする論者の間にもすれば感情的な揚足取りが行はれ易い所だが兩氏の極めて紳士的態度によつて左様な弊から超脱した事は近頃欣快千萬である。

我の論旨は重大な過誤が現代醫家によつて報告された例を擧げてその學術的批判を専門家に求めたのである。

私の期待は専門的學術的の批判によつて、

- 一、鍼術の過誤なりや否やの判定が出来るか
- 二、その過誤は如何にして生じたか、内臓穿孔といふ様な現代的説明なくして鍼術的解釋は如何か、その過誤は避け得られるものか否か
- 三、過誤によつて惹起された症狀に對する鍼術的處置如何、換言すれば最後まで鍼術的療法が可能であるか
- 四、症例の如き場合の該刺鍼部位の選擇は妥當であるか、若し然らざれば何處を選ぶべきであつたらうか
- 五、等が解明されて行くことであつたはを學術的に取扱ふに當り必ずしも現代醫學的説明方法を要しないのは言ふまでもない事で、むしろ純古典的鍼術の立場から批判すべきことを期待してゐた。無論現代醫學的説明がつけられることは何等碍げとなしなば可からることは何いかに得る所があるであらう。

兩氏の御意見は、

(一)、若干の過誤の爲めに斯界

全般が責任を負はされてはたまらぬ。(ロ)、現代醫學的知識は必ずしも要せぬ。(ハ)、此過誤は太鍼の誤用によつて惹起されたものだ。

との三點に於て一致してゐる。是は鍼灸家の立場としては御尤なことではあるが、然し問題は私が御尤と云つただけで一面面はすんで舞臺は廻つたやうに見えるが、直ぐ廻舞臺の傍にあつた新しい場面が展開されて行くのである。

兩氏とも外科醫の過誤を擧げて居られるが、それはそれ、是は是である。外科醫の過誤は或は失敗例として告白的に報告され、或は患者一般の信用を失ふことによつて罰はれ、或は直接患者より告訴されて責任を明かにされてゐる。さう云ふ例に屢々遭遇するにも拘らず一般の外科醫に對する信頼は失墜されず依然として開腹術等の大手術を受ける者益々多きを加へるは何故であらうか。

その理由のうち今の場合特に力説したいのは、さう云ふ過誤を打越えて行かうとする努力があるからだといふ事である。過誤は過誤として明かにし進んで他の批判を求め科學的に、徹底的に過誤の原因、現象、對策等を究明せずには置かないといふ學問に對する良心と熱情があらゆる障礙物を乗り越えて現代醫學を前進させるのである。

若干の過誤の爲めに全體が責任を負はされてはたまらぬといふのが兩氏の態度なら、若干の過誤と雖も全體の責任として善後策を講究しやうといふのが現代醫學的態度である。

(私は此所まで書いて來てふと目

下讀みつゝある日本宗教思想史に引用された「一心は一切なり、一切衆生は一心なり、一切衆生は衆生なり、一切衆生は衆生なり、一切衆生は衆生なり、一切衆生は衆生なり、一切衆生は衆生なり」が思浮んだからそのまゝにメモして置く)

又兩氏が指摘された外科醫の過誤は決して刺鍼過誤そのものを擁護したり正當化したりはせぬものである。若し兩氏が興味を持たれるなら別に筆を起して之を論評されるがよい。泥仕合のお附合なら折角ながら御免を蒙る。

戸部氏の言によれば「世の大部分の鍼灸師はこんなへまはやつてゐない」との事であり、柳谷氏によれば「慢氣の刺家」である出であるから患者は「大部分の鍼灸師」就中「慢氣せぬ鍼灸家」について治療を受けたならば保證つきであることが判つたのは大いに仕合せとすべきだ。

第二に鍼家に現代醫學的知識は必ずしも要せぬとの事であるが、先に擧げた過誤例の如きはたとへ刺鍼の癩癩に達せずとも、現在行はれてゐる鍼灸師資格檢定試驗問題程度の一腹部大動脈は何處に在つて若し之を刺せばどうなるかといふ位の極めて常識的な事柄に過ぎないのである。さう云ふ程度の現代醫學的常識すらも不必要として否定し得るのは刺鍼の癩癩に達した僅少の人のみがよく主張し得る所であつて、大部分の鍼灸師は鍼術の癩癩に達する以前の過程に於てはこの常識的戒則を心得ることによつて一つの過誤を避けられやう。その方が手近かであり誰にでも行はれる普遍性を持つてゐる。受験勉強を活用せよという現行制度に於てはこれ位の現代醫學知識は持つものとして資格を與へる以上、腹部大動脈は腹の眞中を通ることは知らなかつたとの辨明は成立しがたい。私が法律的に

もと云つゝ意味は實に此點に在るのである。

現代醫學的知識といつても私は大學教授が學會の宿願報告や特別講演に於て行ふやうな高遠なものゝ悉く知つて居れとまで要求してゐるのではない。さう云ふ高遠な知識は我々臨牀家殊に開業醫にあつては餘程絶えず勉強して居なければ追付ぬ位である。(勿論私は追付かうと努力してゐる)

現代の醫師殊に開業醫が知つてゐる位の醫學知識を知る程度で充分なので、私が醫師と對診したい等の知識があつて欲しいといふのはその程度を指摘したに過ぎない。

私の所へ同感生といふペンネームで激越な投書が來たが、投書のつもりで居たけれど御參考のため次に御披露して置かう。

前略第一第二例小生も見學せし例あり。非醫者の横行見るに堪へざるものあり。新進の鍼灸家とか春秋に富む俊才とかの最も將來を期待される者多し。此輩に多く見られる現象にて、現代醫學を諷る日本醫學の恥辱と云ふべきでせう。

免狀一枚云々以外の外、免狀一枚貫ふ迄の努力よもやお忘れはあるまい。小學校を出たばかりで講義録か何かで醫の字を知つたばかり現代醫學の知識を養ふ等と遠慮は無用、もう少し太い鍼と富七灸位の灸を來月號にも願ひます。(九月十六日投函)

是は私の取らざる所である、私の論旨は資格及び資格を獲得する勞苦をいふのではなくて鍼灸醫としての本質問題を取扱つた筈である。醫學は醫師といふ法律的資格を與へられた職業人のみが獨占すべき理由は決してない。鍼灸家と雖も疾病を治療するといふ目的論的には矢張り醫師(醫師ではない)醫師は醫術を行ふもの、中より限定された法律人である)であり得る。その醫行爲に携る鍼灸家中

## 昭和十四年度 拓大漢方醫學講座講義頒布

- 一、傷寒論、金匱要略解說(一一六頁) 大塚敬節
- 二、傷寒論、金匱要略階梯(十五頁) 大塚敬節
- 三、漢方治療各論(一〇五頁) 木村長久
- 四、後世要方解說(三十七頁) 矢數道明
- 五、漢方治療各論(六十六頁) 矢數道明
- 六、漢方醫學總論(八十六頁) 矢數有道
- 七、漢方藥物學講義(七十三頁) 清水藤太郎
- 八、漢方醫史學講義(八十一頁) 龍野 一雄
- 九、鍼灸灸穴學、治療學講義(一三三頁) 柳谷素靈
- 十、經驗藥方分量集(十一頁)

右十冊ノ中七、十ヲ除ク以外は全部増補改訂版、全揃金拾圓也にて希望者に頒布す(送料當方負擔)

東京市牛込區新小川町二ノ七(溫知堂内)

東亞醫學協會

電話牛込(34) 二七七二番  
振替東京一一九、四三〇番



# 續 無醫村を行く

……農村と結核……

## 神谷卓

私が北海道の農村(寧知、上川地方)で調査したところに依ると来院患者五〇〇名のうちロイマチス、神経痛疾患が二四〇名、呼吸器疾患が一四五名、他は消化器、血行器疾患その他である。是れは今から三年程前の調査であるが、當時札幌の北海道醫學會の發表によれば三、〇〇〇名に對して呼吸器疾患がその七割以上を示して居り、その他消化器疾患、ロイマチス性疾患が記されてゐる。

近來農村に於ける肺結核患者の續出は特に注目すべきものがあるが、肺結核で死ぬものは日本では二十歳から二十四歳までが一番多く、次は十五歳から十九歳までとなつてゐる。實に驚くべき數に達して居り、この中に紡績織物の男女工が非常な數を示してゐると想像しても決して誤りはないであらう。私は現在織物都市に居住する者であるが、この都市に働らく數千の男女工の肺結核罹病率を明確に知り得たならばおびただしい數に達するのではないかと思つてゐる。

勿論原因には種々あらうが、過激な勞働(男女工は未だ封建的徒弟制度の支配下にある)と所謂營養食たる美名のもとに配給される非營養物の常食、工場衛生の不徹底等がその主要な原因ではないかと私は考へてゐる。過日私が工場座談會に出席し、男女工の卒直なる訴へを總括すると、一病氣になつたら休養させて呉れ。二、食物が非常に悪い。三、工場内に日光が入らない。四、月經中は勞働

時間を短縮して呉れ。五、正午の休みを一時にして呉れ等であつたが、こんなことは當然の要求であると思ふ。

然もこれが當然のこととして資本家側に容れられぬところに彼等男女工の血の叫びを聞き得るのである。四、の月經中の勞働問題は重大である。ソヴェトでもドイツに於いてもかかる場合には適當なる處置が講じられてゐると聞くが女性が職線に就く者十等を生むのだと思へば仲々この問題は簡単に考へらるべき性質のものではないであらう。

私の居住地に於いて、死亡者の八・三九パーセントが結核で死亡してゐると市當局が(十一月十日)東日に發表されたが毎年女工の結核死亡者が男工より多數であるといふことは、特に注目すべきである。

これ等の男女工は主として農村青年であるが、一たび病に罹り歸郷した男女工の肺結核が地方農村の青年男女に蔓延して行く事實を耳にするが、この傾向は更らに強げしくなつて来たやうである。これは國家として由々しき大問題である。近ごろ農村青年の體格劣下等が瀕々として傳へられ政府も之れが對策に腐心してゐるやうであるが、農村から結核をなくするには如何にすべきか。全國に何萬何千とあるかゝる工場が存在を忘却すること勿れ、私は當局に苦言を呈するものである。都會と云はず農村と云はず青年男女が結核に侵されるを憂ひ、政府がその豫防對策に乗り出してからすに年

久しい。歴代の内閣が代る度毎に掛懸勇ましく農村救済と結核豫防を叫び大なり小なりその對策を講じて来たが皮膚にも事實は全く逆で、都市と農村を問はずして結核は益々増加の一途を辿るのみである。ポスターやパンフレットを配布しただけで結核が撲滅出来ると思へたら大間違ひだ。從來の如き結核豫防対策として單なる一時しのぎの大海に目薬式の方法では決してこの仕事は成就しない。

農村青年が都會に出て来て工場に雇はれる。一年足らずして病氣となる。ソコには健康保険といふものがある。保險醫にかゝつても少しもよくならない。もつといふ薬はないかと醫者に聞くと「損保ではこれ以上の薬を使つたら保費が三割云つたに聞くとこれは私が傍にゐて直接聞いた言葉である。そこで青年は都會に見切りをつけて農村に歸るより方法がない。そこに待つものはたゞ死のみである私が松田基次郎氏の「土に叫ぶ」で有名な山形の現代醫務制度の矛盾を感じたことはなかつた。都會から戻つて来た結核患者を抱へてゐる親達は自作農でも家財をなくして娘を賣つて醫費としてゐる家は數へ切れない。農民が結核に罹れば大部分は死んでしまふ。二、三年前の「漢方と漢藥」誌に農民は死んでも死亡診斷書さへ求める金がない爲に死人を二十日も一ヶ月も放置してゐる者もあると書いてゐたが、これは事實である。斯様に醫學が進歩してゐるのに賣薬を服むとは無智も甚だしいと醫者が憤慨しても醫者に診て貰ふ金がなにか仕方がない。

東北のある病院で醫者が見るかに貧乏らしい結核患者の農民に「君もつと營養をとらなきやあ駄目だよ」と忠告してゐるのを耳にした。

の命令するやうな養生法は到底彼等の一日たりとも實行出来るものではないのである。北海道の農民で喉を喰はない病人はたゞさんで、南瓜ばかり喰つてゐるので顔色が黄になつてゐる農民はザラにある。之等の農民をつかまへて、「サナトリウムに行け」とか「營養分をとれ」などと云ふのは眞に農民を理解せぬ者の言である。吾等は農村の結核を如何にして驅逐すべきか。醫務に従ふ者はこそつてこの根本問題を探求し農民を苦しめる一切をこの地上より抹殺すべく努力すべきである。嘗て蔣介石は「日本は戦争に勝利を得ては三省つたに聞くとこの言葉は將に三省すべき價値があるのではないであらうか。

私は今更ら無醫村に醫者を置けなどと云はない。無醫村に醫者が駐在したとて現代醫學をその儘採用し今の制度下では決して農村から結核を驅逐することは不可能である。

日本農村は餘りにも土地が狭少である。もはや大陸移動以外に日本農村の救はるべき道はないのである。しかもこの事變によつてその人的要素の必要を痛感した當局が滿蒙青少年義勇軍をはじめ、農村の集團的移動を開始しつゝあることは喜ぶべき現象である。彼の移住地には拓務省囑託たる醫師が駐在し醫務衛生に従事してゐると聞くが、筆者はこの役の一端なりとも吾等鍼灸家に與へよと當局に希望するものである。移住地の清い農村を内地農村の如く結核の巢復してはならない。アジア農業の復興はいつに日本農民の健康と強固なる意志にかゝつてゐると思へば今後の醫師や鍼灸家の使命は重大である。

今既に始まりつゝある世界大戦で農村の疲弊せる國家も出来るであらう。しかし乍ら自國の農村を荒廢せしむる國家は永遠にこの地上よりその姿を没するのである。農業なきイギリスは如何であらうか。その末路が古代ローマと同じ運命に陥らないと何人が斷言できるか。現代に於ける大英帝國の苦肉を見よ、英國資本主義の暴政に反抗しつゝある殖民地の獨立運動は必ず近き將來に成功するであらう。殖民地の農民を虐げ搾取することに於て榮へつゝあつた英國資本主義の瓦解は必然である英國のみではない。自國の農村を荒廢せしめ省ることのない國家の發展は期し難い。農村をよくすること、農民を愛する國家のみが最後の勝利者となるのである。現代の日本農村は甚だしい荒廢の中に彷徨してゐる。農民は結核の中にやがされ農村青年の結核死亡率は年々増加して行く。都市は農村よりすべての機關を奪ひ農村に残る

ものはたゞ死の寂寥と單調と無智と朦朧のみである。人口は膨脹し自然は破壊され結核の蔓延は青年をして神經衰弱に陥れてゐる。吾々は斯の如き状態を一日も早く打開すべきだ。農村を犠牲にし都市を病的にした現代西歐文明は根本より革新されねばならない。さうでなければ皇國の文明は死滅するであらう。

吾々はいま世界第二動亂の渦中にある。唯物自由主義は我が國に於いてもすでにその後退を餘儀なくされてゐる。如何に日本醫師會がひとりその牙城を固守せんとするも時代の波は醫師會のみをその圏外に置くことは出来ないであらう。今が時だ。同胞のために日本農村のため私心を去つて天皇の醫師の大道に還られんことを切に切に希ふものである。(十一月十七日夕)

## 肺結核の豫防と治療の主要事項

### 西澤生恵

現在の如き肺結核の増加を見るに至つた根本原因は、教育制度の缺陷であります。即ち唯物思想の一方的發達と共に、根本的な唯心思想を等閑にふし枝葉的な科學の偏則的發展に依るものであります。

その結果、思想の亂れと共に眩惑的な西洋醫學(西洋藥學)の科學教育が、我が國の傳統的な食制を紛亂せしめ國民の體質並に平均年齢を年々低下せしめるに至り、現在の如く肺結核患者を續出せしむるに至つたのであります。

然るが故に先づ原因を除く事が第一であります。それには、教育制度の改訂を必要とするのであります。その目的遂行の爲に、先づ本協會に次の如き事項の實行を切望する者であります。

一、東亞醫學協會に食養部を設置する事  
二、内部の研究を一層學理的に知的に強固にすると共に團結力と統一力を強固にする事  
三、當局に向つてその他の實行によつて大衆教育にのり出し、實際的に學問的に與論を喚起せしめる事  
則ち食物は吾人の生命を養ふに必要不可欠からざるものであると共に食養は天下の大本であり、皇漢醫道の上位を占むるものであります。故に皇漢醫學を専攻せんとする者は必ず學ばねばならぬものと

# 風邪の漢方療法

大塚 敬節

## はしがき

私は今、風邪を引いてゐる。鼻を塞がせて、鼻を鳴らしてゐる。そこで思ひ付いて、風邪の漢方療法をかくことにした。これから風邪の流行する季節だ。私が今風邪に罹つたのは、宴會に招かれて喰へすぎてからだ。私は胃腸が健全の時、寒い目に逢つても仲々風邪にかからないが、喰へすぎたり、不規則に食事をしたりしてゐると、きつとやられる。世人は風邪に罹らない様に皮膚を丈夫にするといふことをよく話す、私に東洞が萬病は腹に根ざすと云つたが、甘いことを云つたものだ、つくづく思ふ。諺に病は口より入るといふが、風邪だつて口から入る様に私は思はれる。さて次に風邪の容態だが、これは書くまでもあるまい。

## 療法

洋方では先づアスピリンといふ處だ。しかし考へてみると、風邪だつて、その人その人によつて、症状が異なるし、その時によつては同じ人でも異なる病状を呈することがある。然るにこれらの相違を無視して、單純にアスピリンを與へるのは、原始的醫療で、民間療法と何等撰ぶ處がない。若しも風邪にアスピリンを用ふるならば、その適應症と不適症とを診斷し、アスピリンを用ひて發汗せざる場合には如何なる處置をとるべきか、發汗しても下熱せざる場合は如何にすべきか、發汗が多きにすぎた疲勞倦怠を訴ふる時は、如何なる藥劑を用ひべきか等々のことに就

いて、具體的方法を指示すべきである。アスピリンを用ひて後に始めて胃の悪るくなつたのを知りアスピリンを用ひて後に、始めてアスピリン疹を生ずる體質であることを知る様では、風邪の治療に於ても、現代醫學は遙かに漢方醫學に及ばないのである。

漢方では風邪の治療に際しても決して之を輕んじたり、あなどつたりしない。チブスやその他の重篤なる疾患と同じ様に、用意周到なる診斷の下に治療法を講ずるのである。通例吾々は風邪に際して桂枝湯、麻黃湯、葛根湯、桂枝加厚朴杏子湯、桂枝麻黃各半湯、小建中湯、五苓散、麻黃附子細辛湯、小青龍湯、柴胡桂枝湯、小柴胡湯、半夏厚朴湯、の如きものを使用するが、これ等の處方は、アスピリンの代りにアンチピリン、アンチピリンの代りにピラミドン、ピラミドンの代りにアンチヘブリン、といふ様なものではなく、夫々適應症がきまつてゐて、桂枝湯を使用すべき處に、麻黃湯を用ふれば病氣が癒らないばかりか、却つて悪化するものすらある。従つて漢方では風邪一つ極すにも、醫者は相當に頭を悩ませねばならないことがあり、その診斷は精密で、處方の撰擇は慎重でなければならぬ。その代りに、一度服藥すれば短時に全治し、他の疾病を併發したり、總發したりすることは稀である。左に如何なる場合に如何なる處方を用ひべきかを述べてみよう。

右を一回量とし水二〇〇(約一合一匁)に入れ半分に煎じつめ、滓を去り一回に頓服す。葛根湯は通常感冒の藥として知られてゐるが、その目標は次の通りである。

さむけがして熱發し、項背が張り、脈が浮にして力があり、汗の出でぬ場合用ふ。これを飲んで温まつてゐると、氣持よく發汗して、そのまま下熱し、多くは一、二日で癒つてしまふ。

二、麻黃湯  
麻黃、杏仁各二〇。桂枝一・五。甘草一〇。

右一回量、煎法は前に同じ。此方は惡寒熱發の外に、頭痛、關節痛、腰痛等があり、脈が浮緊で汗のない場合に用ふるものであるが、鼻が通つて苦しいの、喘鳴もこれで通ずる様になり、喘鳴も亦これで癒る。私は風邪にかかると大抵は麻黃湯でよくなる。葛根湯をのむとどうもよくない。四五年前まで、よく葛根湯を用ひたが、どうも経過ははかばかしくなかつた。よく考へてみると葛根湯の證は多く、麻黃湯の證を呈するものが多いのを知つた。

三、桂枝湯  
桂枝、芍藥、大棗、生姜各二〇。甘草一〇。

右一回量、煎法は前に同じ。此方は脈が浮弱で、汗が少しづつ出でゐる様な風邪に用ふ。さむけや熱も左程著しくない場合が多い。又麻黃湯や葛根湯で發汗してあれば此方を用ふ。

四、桂枝麻黃各半湯  
桂枝一・七、芍藥、生姜、甘草、大棗各一〇。杏仁二。

右一回量、煎法は同じ。此方は麻黃湯と桂枝湯とを半分づつ組合せた方劑で、麻黃湯で發汗せしめる様な浮緊の脈ではなく、それかと云つて、桂枝湯で力が足りないといふ場合に用ふ。

五、桂枝加厚朴杏子湯  
桂枝、芍藥、大棗、生姜各二〇。甘草一〇、厚朴一〇、杏仁二〇。

右一回量、煎法は前に同じ。風邪にかかると直ぐ喘鳴を訴へ熱などはなく、あつても輕微で、一般瘧疾の輕い場合に用ふ。老人や幼兒で風邪にかかると喘鳴を發すると云ふ者に、此方を用ふる場合がある。

六、小建中湯  
桂枝、芍藥、大棗各二〇。芍藥二・五、甘草一〇。

右一回量、煎法は前に同じ。〇を加へて再び火に上せ、煮沸して溶解せしめ、之を温服する。膠飴は水飴にて代用してもよい。

平素身體の虛弱の人は、風邪にかかると、心悸亢進を訴へることがある。かかる際には發汗劑を用ひてはならない。又幼兒では風邪にかかると腹痛を訴へることがある。以上の如き場合には此方を用ひなければならぬことがある。

七、小青龍湯  
麻黃、芍藥、乾姜、甘草、桂枝、細辛各一・二、五味子一・五、半夏二〇。

右一回量、煎法は葛根湯に同じ。此方は風邪で惡寒熱發を訴へるばかりでなく、喘咳の頻りに出るものに用ふ。汗は出ないで、稀薄な痰の多く出るのを目標の一つとする。

八、麻黃附子細辛湯  
麻黃二〇、細辛一・五、附子一〇。

右一回量、煎法は前に同じ。風邪にかかつても、脈が浮とはならず、却つて沈み、惡寒熱發して汗の出ない場合に用ふ。老人等には風邪にかかつても、麻黃湯や葛根湯を用ふる様な症候とはならない。此方を用ひねばならないことがある。

九、五苓散

澤瀉五分。猪苓、茯苓、朮各三分。桂枝二分。

右を細末となし、一回量一〇を重湯又は白湯にて服す。小兒の感冒を麻黃湯や葛根湯で發汗すると、その後で、小便の出る量が少く、嘔吐と共に飲んだ水を吐出する様になることがある。水を吐いたあとは又口渴を訴へて飲むが、暫時にして再び吐出するかかる際には此方でなければ嘔吐も止まないし、熱も下らない。

十、小柴胡湯  
柴胡三〇。半夏二〇。生姜一〇。黃芩、大棗各一・二、人參、甘草各一〇。

右一回量、煎法は前に同じ。麻黃湯や葛根湯で發汗したため、今迄浮であつた脈が沈緊となり、熱が往來寒熱の狀としたり、或は微熱がつづき、食慾は不振となり、口苦く、或は口を粘る等の症候となれば、此方を用ふる。

十一、柴胡桂枝湯  
柴胡二〇。半夏一・五。桂枝一・二。黃芩、人參、芍藥、生姜、大棗各一〇。甘草一〇。

右一回量、煎法は前に同じ。此方は小柴胡湯と桂枝湯とを合した方劑で、小柴胡湯の證に似て症狀輕微であり、更に桂枝湯の證とあつたものに用ふ。

十二、半夏厚朴湯  
半夏三〇。茯苓、生姜各二〇。厚朴一・五。蘇葉一〇。

右一回量、煎法は前に同じ。風邪にて下熱後、高聲の嘔れるものに用ふ。又此方に甘草湯合方の意味にて、甘草一、五を加へ、後世方の香蘇散を用ふる如き胃腸虛弱なる人の輕微の風邪に用ふ。

十三、麻杏甘石湯  
麻黃二〇。杏仁二〇。甘草一〇。石膏五〇。

右一回量、煎法は前に同じ。下熱後、喘咳止まず、口渴ある

者に用ふ。又、よく小兒、風邪にて熱なく、嘔吐を訴ふるものに用ふ。

以上に掲げた方劑は夫々の適應症を誤らなければ、奏效確實にして、服用後に副作用を起すことはない。私の小學校時代の友人が先年要件で東京してゐる中に、風邪にかかり、ホテルまで往診して呉れと云ふので、久しぶりで面會した。その友人は平素、胃下垂があり、常にそのために悩まされてゐるが、風邪に掛ると一ヶ月は必ず快復しないといふ。私は診察後早速半夏厚朴湯加甘草を與へ、三日にして全快してしまつた。友人は非常に驚き且つ感謝し、その後は風邪にかかると、電報で、前の風邪藥を送つてくれと注文して来る始末である。

これから愈々風邪の活動する季節となつた。漢方藥に從來親しんだことのない人も、風邪の際、漢方藥をのんで、漢方黨になる人が多い。それ程にアスピリン流の治療と、漢方の治療とは格段の相違がある。

一、漢方と漢藥 十二月號 日次

和田東郭に就いて 石原 保秀

素問の研究に就いて 矢數 有造

陰陽虛實論 三上 智平

石膏の溶解度 海老塚吉次

有終庵雜鈔 奥田 謙藏

灸療雜話 代田 文誌

漢藥を語る座談會 石井 陶伯

診察餘話座談會

雜病雜要 石井 就三

百病一貫 鮎 川靜

風外山房治驗 鮎 川靜

治驗三例 竹内 修一

治驗一例 星野 達

編輯雜話 氣賀 林一

馬尾庵雜筆 荻 里 人

食養法に就いての所感西澤 生惠

傷寒論の研究 大塚 敬節

### ○東亞醫學協會十一月例會

十一月廿二日午後六時より拓大講堂に於て例會を開催、折からの寒雨にも不來會者多く盛會であつた。當日の講演次の如くである。講師はそれ／＼熱意を以て愈々來月より本論に入ることゝなつた。

- 一、傷寒論の研究 大塚敬節氏
- 一、素問の研究 矢數有道氏
- 一、蟲媒疾和垂炎の實驗的研究 龍野一雄氏

### ○東邦醫學社主催 漢方を語る大座談會

十一月廿五日午後六時より日比谷松本樓に於て東都漢方醫家を總動員して大座談會を開催し、駒井一雄氏、竹山晋一郎氏の進行により十時散會、稀に見る盛會であつた當日の出席者次の如し。

- 湯本求真、小出壽、和田正系、大塚敬節、荒木作次、矢數有道、矢數道明、田中吉左衛門、内山孝一、馬場和光、津田駿輔、柳谷素靈、伊藤是、駒井一雄、竹山晋一郎の諸氏。(會席順)

### ○日本醫學研究會總會

日本醫學研究會にては去る十一月三日午後二時より、神田淡路町東京醫師會館に於て定期總會を開き、講演會を催し、終つて同會館食堂に於て懇親會を開催した。當日の講演者は次の如くである。

- 一、著腹症の統計的觀察 馬場 和光氏
- 一、漢方醫學の現代的意義 和田 正系氏
- 一、時代と醫學 浦本政三郎氏
- 一、閉會の辭 内山 孝一氏

### ○醫療制度改革問題對策協議會

日本醫學研究會に於ては去る十一月廿三日東京醫師會館に於て幹

事案に對する協議會を開き、決議を行ふた。

### 本協會援助費芳名

- 一金貳拾圓也 埼玉 吉田 一郎氏
- 一金拾圓也 東京 武藤 留吉氏
- 一金五圓也 東京 小島七五郎氏

### 本誌購讀料 納入者芳名

- 東京 金平ステエ氏
- 安達捨次郎氏
- 河田孫一郎氏
- 木村 ハナ氏
- 兒玉 至弘氏
- 池田 亨侃氏
- 全 鳳藏氏
- 渡邊 耕藏氏
- 加藤 教雄氏
- 渡邊 武氏
- 石井 公平氏
- 上原 順子氏
- 辰井 文隆氏
- 秋山 永門氏
- 坂口 芳齋氏
- 徳永千代松氏
- 清水 豐三氏
- 野村 洋吉氏
- 元 周 協氏
- 桐生 修伯氏
- 木村 修伯氏

### 十一月例會出席者

- 野田一之丞 山本平一郎
- 鈴木 泰助 深堀 賢治
- 板倉 てる 金平ステエ
- 相澤 一雄 齋藤安之助
- 加藤 教雄 藤井治郎作
- 高橋 庄三 山口 良平
- 永井 龍子 前川勢津子

### ○吉益東洞を語る 座談會

去る十二月十日夜、日本漢方醫學會主催にて、吉益東洞を語る座談會が、日比谷松本樓で開催された。當日は湯本求真、奥田謙藏、石原保秀、和田正系、早田玄白、龍野一雄、大塚敬節の諸氏が出席して、顔面筋肉が疼痛を覚えて程論じ且つ笑つた。當日の記事は、「漢方と漢藥」一月號に掲載される。

### ○蘇州國醫學院にて 月刊醫學創刊される

蘇州國醫學院院長唐慎坊氏主宰の月刊醫學が近く創刊されることとなり、湯本求真、大塚敬節の兩氏に題字の執筆方を依頼して來た同學院は漢方の科學化を提唱する葉橋泉氏が醫務主任として活躍されて居り、吾々はその發展を期待してゐる。

科學を以つて理を説き、漢學を以つて病を治す、劃期的の大著刊行さる

蘇州國醫學院 葉橋泉著 近世漢方內科處方全書 全六集 十二册

【既刊】 第一集(二册) 傳染病 一圓四十錢

- 第二集(二册) 消化器病 二圓
- 第三集(二册) 呼吸器病 一圓四十錢
- 【近刊】 第四集(二册) 神經病 第五集(二册) 循環成血器官脈病等 第六集(二册) 泌尿新陳代謝物理中毒病等

○購入希望の方は、蘇州馬醫科十號、葉橋泉氏宛御申込み下さい。第一より第三集までまとめて御求めの方は送料共四圓二十錢御送りになればよい、第四集より第六集までは一集毎に一圓となる豫定。

### 原稿募集

次號新年號には本誌會員諸氏の年頭に際し所感を御投稿下さい。

本協會に對しての御希望とかなんでも結構です、どしどし御寄稿下さい。べ切は十二月末日

編輯部

「編輯後記」

○本年度最後の號を送ります。

年改まつて來る新年號より内容大いに一新、潑刺としたものを御送りし度いと意氣込んでゐますから御期待下さい。廣く一般の會員の方々よりも是非よき御原稿を希望いたして居ります。年未大多忙の中にこの編輯を終ります。佳き新春を迎へられるやう會員諸子の御健康を祈ります。

### 生々堂醫譚

本書は我國の古方に一新生面を開き、吉益、和田、高階の諸大家と共に、平安の四天王と讃へられた中神先生の口授せるものである。

### 診病奇佞

古來の診法に所謂腹診を以て重要缺くべからざるものとしたことは申す迄もない。本書は即ち有名なる腹診法「診病奇佞」にして森根園先生の書入本、山田樺庭先生の藏本を底本とし、松井子靜先生の漢譯本、其他諸先生の藏本を参照校訂せるものなり。

### 和漢醫學六診提要

古來の診法に望聞問切の四診があり、江戸時代の中世、古方の泰斗後藤良山が之に按腹と視背とを加へて六診とし、門下の香川修庵が大に之を祖述した。本書は即ち其流れを汲む者の述作である。

### 註譯金鷄醫談

▲水道雲著 ▲石原保秀譯註 ▲菊判五號活字・和裝 ▲價一圓・送料十錢 本書は寛政享和時代に、醫及び狂歌を以て、天下に其名を馳せた畑道雲先生、即ち奇々羅金鷄先生の隨筆で、五十餘項目が収録されてゐる。

### 山脇家八十二秘方

▲石原保秀校註 ▲プリント刷 ▲和裝 ▲價一圓五十錢 ▲送料十錢 山脇家に於て最も有名な醫師東門先生の輯録された同家々傳の八十二秘方で、小松奇山氏の寫本と山脇家門流の雄、原南陽先生秘の藏本とを對照校訂せるものである。

申込所

東州市杉並區井荻町三ノ四〇 和漢醫學社 振替東京三三六九